

羅針盤



患者の求めているもの：それは後遺症のない治療

東 禹彦

Nobuhiko Higashi

東皮フ科医院院長

先日ある学会で爪の役割がよくわからないという発言を耳にしたので、特集ではまず爪の役割について記すことにした。

近年、爪疾患に対する関心が高まっている。一つは爪白癬に対する治療薬の発売により、テレビでの啓蒙活動が行われ、爪異常を主訴に皮膚科を訪れる患者が増加した。陥入爪や巻き爪の新しい治療法、超弾性ワイヤー法やVHO法の宣伝、またフットケアに対する関心の高まりなども影響している。

このたび、爪疾患についての特集の編集を依頼され、どのような疾患を取り上げるかを考えたのであるが、陥入爪および巻き爪に関しては多くの雑誌(J Visual Dermatol Vol.3, No.12, MB Dermaで数冊)でも取り上げられているので、省略することにした。

患者が求めているのは病気の診断もそうであるが、病気の治療で、それも後遺症がなく、正常化することである。以前、陥入爪に関する欧米の文献を読んでいるときに、Zadikによる爪母全摘術やLapidusによる末節骨離断術の必要性がまったく理解できなかった。これらの手術は陥入爪の楔形切除術(フェノール法も同じ)による後遺症に対して必要となる手術であることが、近年ようやく理解できるようになった。長い目でみれば、陥入爪の楔形切除術(フェノール法も同じ)は患者の期待に応える手術ではない。手術の上手下手ではなく、理論的に変形を生じる手術法なのである。

爪甲鉤彎症は高齢者の疾患のように思っていたが、当院で統計をとって見たところ30歳代から認められ、し



だいに増加する疾患であることがわかった。爪甲鉤彎症は従来治療法がないとされていたが、外来通院でも手術によって治療可能な疾患なのである。この治療においても、陥入爪の楔形切除術を受けて生じた爪甲鉤彎症に関しては手術が成功しないのである。十分な問診をしなかった筆者が悪いのであるが、上手な楔形切除術が行われていると、爪甲の幅が狭くないので、抜爪や外傷による爪甲の脱落后に生じる爪甲鉤彎症と見分けがつかないのである。

爪部悪性黒色腫に対する関心も高く、爪の黒色線条を主訴に受診する患者も多い。爪部悪性黒色腫に関してはダーモスコープ所見を含めて専門の先生方をお願いした。爪の良性腫瘍で多い爪部線維腫、爪部外骨腫については安木良博先生をお願いした。良性の腫瘍では、爪部にできるだけ変形を残さない治療を行うのが良いと考えている。

爪白癬でない患者に抗真菌薬の内服が行われている例も多い。診断と治療に関してまだまだ知識が十分に行きわたっているとはいえない。それゆえ、爪白癬との鑑別が必要な、爪に肥厚や混濁を生じる爪乾癬や掌蹠膿疱症に伴う爪の病変や爪異常栄養症についても取り上げた。爪白癬で指爪がすべて侵されることは稀であるのに、黄色爪症候群も爪白癬として治療されていることがある。

まだまだ原因も不明で適切な治療法のない爪疾患も多いのであるが、できるだけ解決に向けて今後も努力するつもりである。